

フランシス・ベーコンにおける 自然の知と人間性

下野 葉月

1. はじめに

フランシス・ベーコン（1561-1626）は、自然を搾取し、人間のために用いることを是とする倫理を築いたとして批判的に語られることがある⁽¹⁾。確かに、ベーコンは人類の繁栄を唱導し、自然の探求は最終的には人間の生活を向上させるためになされるべきだと考えた。しかしながら、ベーコンの語る自然の知とその獲得には、聖書に記された神と人間の関係性や、キリスト教の愛の理念に基づく規範が伴う。本論文では、これがどのように示されるのかを追究し、ベーコンによる自然の知とその獲得に関わる思想の見通しを提示したい。

ベーコンは、初期近代にアリストテレスのテキストに沿って進められたスコラ学的な自然哲学を批判し、自然への実質的な関与と経験にもとづく研究を奨励した。彼は、その功績により近代科学の興隆と組織化を促した人物として知られている。十七世紀後半には、当時設立された自然科学系の学術機関、王立協会（Royal Society）の理念を形成した人物として崇められ、その後も科学技術を駆使した産業化を推し進める思想を提示した人物として高い評価を得ることとなった。しかし二十世紀に入ると、彼は人間中心主義的な産業化を推し進め、環境を犠牲にしてきた西欧文明の元凶として批判されるようになる⁽²⁾。このようなベーコンの思想の解釈史を理解した上で注意したいのは、自然科学の近代的な萌芽に貢献したとされるベーコンが、現代のわれわれが考えるような自然科学の知を突如として提出したのではないということだ。

人間が自然に関する知を正しく体得して、それを増大させるというベーコンのヴィジョンは、ただ功利主義的な枠組みの中で進められるのではなく、宗教的なコンテキストの中ではじめて正しく理解される。本稿を通して、ベーコンが思い描いていた自然の知が、現在想像されるような観察や実験から得られた事実の集積や、そこから判定されうるかぎりの自然法則に関わる査定などとは全く異なり、道徳的な次元に存在しているものであったことが明らかになるだろう。自然の知とは、ただ唯物論的に構想される自然を対象とするのではなく、愛という理念のもとで神によって人間に与えられ、同じ理念のもとで人間が育むべきものとして提示されるのである。

2. 知をめぐるタブー

2-1 神の植えた知識の実り——予言の解釈と歴史——

まず、バイコンの名著『ノヴム・オルガヌム *Novum Organum*』（1620）の扉絵に注目したい（図1）。ここに示された二本の柱はヘラクレスの柱と呼ばれ、ジブラルタル海峡を挟む両端を示し、初期近代まで西方の果てとして、ここから更に西方へ行くことは危険として「*Nec plus ultra*（これ以上何ものなし）」という航海者への警告と共に表現されていた。この柱はヘラクレスが課された十二の苦行のうちの一つ、ゲリュオン（怪物）が所有する牛をエリュテイア（太陽の沈む赤い島）からアルゴスまで連れ帰るという使命を果たす途中、ジブラルタル海峡を渡る時に建てたものとされている。しかし、大航海時代になると既知の世界を超えて行こうとするスペインのシンボルとして採用された。この扉絵の中では、両柱の間の向こう側に船が描かれ、下の帯に「*Multi pertransibunt & augebitur scientia*」というダニエル書（12:4）からの引用が付されている。この予言の言葉をバイコンは、「多くの者が通り知は増大する *Many shall pass to and fro, and sciences shall be increased*」と解し、航海や商業を通じた人々の往来によってもたらされた世界の広がりや更なる知的発見が同じ時代に起きることを示していると解釈した⁽³⁾。

2-2 知識獲得のタブー

では、なぜバイコンは上記のような主張をする際に、聖書からの予言の言葉を頼りにしなければならないと考えたのだろうか。ここで視野に入れなければならないのは、西欧の古代から中世を経て、初期近代に至るまでに認められていた知識に関する文化である。それは、「知る」ということに対して一定の制限を設け、知識欲を牽制しようとする文化である。「好奇心（*curiositas*）」をタブーとして捉える視点が歴史的に認められるのだ⁽⁴⁾。

好奇心をタブー視した初めの人物として挙げられるのはアウグスティヌスである。彼は自己の内面に重点を置いたため、他人のことを詮索したり、自然や天空の謎に迫る等の行為を、あえて避けるべき禁忌（タブー）として提示した。好奇心は、感覚的なものに陶酔することによる精神の腐敗をもたらすため、傲りや欲情と共に三つの罪として定義づけられた。禁じられた知的探求や、自己の放置や隣人への過度な関わり等が、好奇心がもたらす害悪の具体的な例となる。

好奇心を厭う文化は中世においても生まれ、修道院内の道德規範として好奇心はうぬぼれに向かう第一歩として位置づけられる。そしてまた、修道院以外の場でも否定的なコンテクストにおいて用いられる。例えば十三世紀ころに好奇心は異端や魔術の実践や関心などと結びつけられたし、大学においては当時隆盛していた「哲学」を批判するための用語として使用された。また、十四世紀には議論のためだけになされる不適切な学問を揶揄するための言葉として、十六世紀には自分自身の放置や、自己の関心を内面ではなく外へ向けること、知ったかぶり等を批判する言葉として流通した⁽⁵⁾。

タブー視された知の中でも、とりわけ自然についての知は人間にとって無意味なものとして認識

されていた。例えば、アウグスティヌスは世界や自然の謎に迫るよりも、自らの内面へと注意を向けて救済を求める方が有益だと考え、自然や世界への好奇的な関与を勧めない。むしろ、そうした世界の探求は誤った傲慢さへと導くものだと考えた。

有徳性を捨て去り、神の本質を知らず、神の永遠性や不変性の偉大さを知ることもなく、われわれが世界と名付けている物質の塊全体の探求に、激しく熱心な好奇心をもって従事することによって、何か偉大な事業に関わっていると思っている人々がいる。そこから、彼らが非常に頻繁に論じる天空のなかに自らが居るかのように想像してしまう傲慢さが生まれてくる。⁽⁶⁾

特にアウグスティヌスは天文学や占星術に従事し、天空に関心が向いている人々を批判した。彼によれば魂の正しい道は星へと向かう傲慢な飛躍ではなく、自分自身のなかへと謙虚に下降し、そこから神へと上昇していくことであった。そのため天空の形態や構造についての問題は、自らの救済を求める人間に関わる必要のないものであり、天文学者や占星術師等は本来注力すべき事柄を怠っているとして批判の対象となった。

彼らはこの道を知らず、自分たちはあの星々とともに高く輝く者であると思っています。しかし、どうです。地に墮落して、おろかな心は暗くなってしまいました。そして被造物については多くの真実を語りながら、被造物の作者である真理そのもののほうは敬虔な態度でたずねようとせず、したがって見出すこともできません。⁽⁷⁾

このような考え方は中世から初期近代に至るまで、「我々の上のものにあるものには関与すべきではない」という格言に集約され機能するようになる。ルネサンス期に数多く流通した寓意の書（エンブレム・ブック）には「高きもの」への知を禁ずる格言や図像が数多く認められ、そこには天空から墮ちるイカロス、聖なる火を空から奪って罰せられたプロメテウス、占星術師などが描かれた。アルチャーティの『寓意の書』（1531）には、占星術師を批判するために、イカロスが太陽に近づきすぎたがために地へと墮ちてゆく絵が用いられ、予言を差し控えるべきだと勧告されている。またプロメテウスの寓意画に添えられた格言は「我らの上にあるものには関与すべきではない」とあり、その説明として「天空や神々の本性を探ろうとする学者の心は、ありとあらゆる不安にむしばまれる」と付されている⁽⁸⁾。

ベイコンも以上のように自然や天空の探求を阻む言説が神学者の間で流通していると認めている。

観照に注力しすぎる人々（神学者）は、自然の然るべき知識に多大な制限をかけてしまう。彼らの自惚れによって阻止されてしまう知識の幅や深みの全ては、人間の機知の高すぎる飛躍であり、神の秘密の行き過ぎた探求し解明であるとして、彼らは不条理にまで汲々としている。⁽⁹⁾

このような自然の知への態度は学問の進歩を阻むものであるため、排除されねばならないとバイコンは考えた。そのため、知の獲得をタブー視する言説は無知から生ずるものだとし、学問が被った不信と汚名からその名誉を復権しなければならないとして、『学問の進歩』（1605）の中で、知の拡大を擁護するための議論を展開してゆく。

2-3 自然の知と墮落の関係

バイコンによれば、神学者は知に関するタブーを設けている。例えば、神学者は「知識は大きな制限と用心をもって受け入れねばならないもの」だとし、「過度の知識に対する熱望が太初の誘惑と罪であり、そのために人間の墮罪がおこった」と考えている⁽¹⁰⁾。彼は知の獲得に関してそれまで設けられてきたタブーを否定するために、原罪というキリスト教の教義上の問題へと迫り、それが知全般の獲得と関係があったのではなく、ただ特定の知識への渴望に問題があったのだと指摘する。ここでバイコンは善悪に関する道徳的な知と被造物に関する自然の知を区分し、墮落を引き起こしたのは前者に対する誤った認識であり、後者とは全く関係ないのだとする。

墮落をひきおこしたのは、自然と普遍についての純粋な知識、すなわち楽園で他の被造物がかれの前に連れてこられたとき、それぞれの特性に従ってそれらのものに名をつけたような知識ではなく、人間自身が自らの法を据え置き、もはや神の掟には頼るまいとする意図——これが誘惑のあらわれなのだが——と共にあった思い上がった善悪の知識であったことに、これらの者たち（神学者）は気付いたり思い至ることがないようである。⁽¹¹⁾

バイコンは自然探求によって自然についての知を獲得することが愚かなことでも罪でもないと看做すことにより、自然探求という知的活動には何の宗教的な制限もなく、妥当な営みであるということを保証しようとしたのだ。

神学者が設けた知の獲得に関するタブーに対して、バイコンは原罪のテーマを引合いに出し、人間の墮落は誤った知の獲得とは関係するが、自然の知とは無縁であるとした。その根拠は、人間が墮落する前に楽園で行っていた行為、つまり神によって創られた被造物に名前をつけるという行為は、本来人間が被造物についての知識を持っていたことの証しであるからだ。

創造が終わってから、人間は楽園の中ではたらくようにおかれたと記されているが、彼に与えられたのは、観照の仕事以外のものであることはありえなかった。すなわち、仕事の目的は必要をみたすためではなく、鍛錬と経験のためでしかなかった。なぜなら、被造物がしぶることもなく、額に汗することもなかったため、人間の仕事は、実用のために労苦することではなく、経験を楽しむことであつたに違いない。繰り返すが、人間が楽園においてなした最初の行為は、知識の二つのもっとも重要な部分、すなわち、被造物を眺めることと、名をつけることから成り立っていたのである。⁽¹²⁾

創世記に書かれた墮落前の人間の状態は、人間の本来的な姿として解釈され、人間には自然本性的に自然についての知が与えられていたと考えられている。つまり、ペイコンの中で自然の知は、自然についての知であると同時に、人間にとって自然本性的な知として想定される。そして、この自然についての自然本性的な知は、人間が墮落してしまったため、保たれずに失われてしまった。そのため、自然の知を復権させることは、墮落からの回復というコンテキストの中で語られる。

人は墮落によって、罪なき状態から墮ちるとともに、被造物に対する支配を失った。しかし、この二つの喪失は、この世においてさえ、幾分かは回復される。前者は宗教と信仰によって、後者は技術と学問によってである。それというのも、被造物は、呪いによって全く永久に反抗するものとされたわけではない。「お前は顔に汗してパンを得る」というあの憲章のために、（議論によってではなく、あるいはなまけた魔術の儀礼によってではなく、）今や様々な労働によって、被造物はついにある程度は、人間にパンを供することに、すなわち、人間の生に利するよう導き上げられているからである。⁽¹³⁾

樂園で人間は被造物を眺め、それに名を付けるという観照的な行いによって、いわば被造物を知的に支配していたが、その力は墮落によって失われてしまった。しかし、そうした人間と他の被造物の関係は、技術と学問によって回復されると考えられている。自然の成り立ちを知り、その知を技術的に活用することによって、再び被造物の支配が可能となるとペイコンは考えたのだ⁽¹⁴⁾。墮落からの回帰を実現させるために必要な技術や学問の発展は、人間が自然についての知を獲得してゆくことによって達成される。

しかし、墮落の原因は、蛇の誘惑に負けて、人間が知恵を求め、「知恵の実」を食したからではなかっただろうか。つまり、知を欲するということが自体が原罪の根本的な原因として挙げられはしないだろうか。先に確認したようにペイコンは、人間の墮落という神学的問題と、自然の知を求め増大させるという彼の学問的構想が衝突しないように、墮落が引き起こされたのは、人間がさかしらに善悪の知を求めたからであって、自然の知を含めた知全般を求めたからではないのだと強調する。ペイコンの考えによると、人間は「他の劣った創造物の統治を任されていたので、権力や支配を必要とはしていなかった」にもかかわらず、「土の身体にくるまれた霊として、光や知の自由に誘惑されがち」であったため、「神の秘密や神秘を求め」、知恵の実を食すことによって、「神から余計に引き離されてしまった」——つまり墮落した⁽¹⁵⁾。知恵の実を食す前に誘惑された人間は、「神のように善悪を見分けられるようになるのだ」と賢しらに求め、これが神から見放されるという墮落の原因となった。ペイコンにとって善悪に関する知は神の秘密の領域に入る類いの知恵であったのだ。その反面、自然に関する知は、人間が樂園にいた原初の時代に神によって与えられたものであった。いわば、自然の知は人間にとって自然本性的な知である。そのため、自然についての知を人間が求めたとしても、それはそもそも神から人間に与えられていたものであるため、罪にもならないし、神から見放される行

為ではない、と解釈されるのだ。

2-4 知による傲慢と知の増大——ふくれ上がり問題——

また、ベーコンは知の獲得によって引き起こされる傲慢に関する神学的言説に新たな解釈を加える。神学者はこれまで、「知識は人間のなかに入ると、人間をふくれさせる (it makes him swell)」として牽制してきたが、ベーコンによれば「知識が人間の精神をふくれさせるなどということはありません」⁽¹⁶⁾。知識が量的にふくれあがる、つまり増加することはあるが、それによって精神がふくれあがる、つまり傲慢になるということはない。ベーコンは「ふくれあがり」という傲慢を意味していた言葉を、知識の量的な膨張を意味する語として転換させ、焦点を人間の道徳的質から知そのものの量の問題へと移行させる。その根拠としてベーコンがあげるのは、神が人間に与えた、ある性質である。

神は人の精神を鏡かガラスのようにつくったため、それは全世界を映し出すことができ、瞳が光を受けるのを喜びとするように、その印象を受取るのを喜びとする。人は様々なものごとや時代の移り変わりを眺めて楽しむだけでなく、それらの変化全ての中に確実に観察される一定の秩序や法則を見出したいと切望する。⁽¹⁷⁾

世界を映し出すことができる人間の精神は、無制限に世界を眺め、聴き、探求することができるのだ。そのため、

人の精神にそれだけの能力と容量があるのなら、知識がどれだけ大きかろうと、その配分あるいは量には何の危険性もない——ましてや精神をふくれさせたりその限界からはみ出してしまうようなこともないだろう。⁽¹⁸⁾

ふくれ上がるのは知の量であって、人間の精神ではない。ベーコンにとって自然の知の量的な増加は、人類の重要課題であった。実際、彼は自然誌の蒐集を人類が成し遂げねばならない事柄として高らかに掲げた。個々の自然の事物を観察し、記述することによって得られる自然誌は、彼が訴える新しい自然哲学の基盤になると構想していた。彼によれば、大プリニウス(23-79)以来、信頼のおけるような類いの自然誌は編纂されていない。当時流通していた自然誌の書物の多くには、古い伝説や言い伝え、権威とされた人の意見、そして迷信的な逸話が含まれており、そうしたものを排除したら、何も残らないほど空っぽだと嘆いている⁽¹⁹⁾。前述したダニエル書の句「多くの者が通る知は増大する」の解釈からも窺えるように、ベーコンは知の量的な増大は、起こるべくして起こる歴史的な宿命だと理解していた。

実際のところ、ベーコンによる自然誌についての記述は非常に多く残されている。彼は晩年、自ら理想とした自然誌を執筆し、『森の森 (Sylva Sylvarum)』(1626)という著作を完成させた。この作品には、自然に関する観察や発見および伝聞の記録が千件収められている。しかし、ベーコンは自然の全てがただ記録されることを望んだのではなく、豊富でありながらも

整理された記録を求めた。『自然誌と実験誌の備忘録 *Parasceve ad historiam naturalem*』（1620）という作品の中で、バイコンは自然誌がどのように編纂されるべきで、何が意図されているのかを明確に述べている。

これは、哲学を築くために役立つ自然誌と実験誌の説明で、そこには検証された題材が含まれ、それに続く解釈の仕事のために豊富に且つきれいに整理されている。（中略）私が思い描いている自然誌は相当な規模をほこり、多くの労働者を必要とする王の仕事として相応しいものであるため、多大なる努力と投資なしには実現されない。⁽²⁰⁾

ここで強調される自然誌の量的な規模は、現在の自然科学でも集積され続けている実験や観察の膨大なデータの集積を想起させる。そのため、バイコンが自然誌の編纂において求めた自然についての知の量的な増加は、確かに現在の自然科学における実践と連続性があるように見受けられる。しかし、ここで留意すべきは、バイコンにとって「自然の知」は完全に物理的な次元だけに還元されるものではなかった、という点である。自然の知は「量」に換算されるような物理的次元を越えて、どのような広がりを持たされていたのだろうか。これを次に検証する。

3. キリスト教における自然認識

3-1 知のヒエラルキー

まず考慮したいのは、バイコンが知そのものの質についてどのように考えていたのかという点だ。バイコンは『学問の進歩』（1605）の中で、当時の知的文化や伝統を批判的に捉え、新たな学問の枠組みを提言してゆく。第一巻の冒頭では、前述したような人間による知の獲得を阻む言説に対して反論し、それに続いて知の尊さを讃えてゆく。バイコンは、知の尊さを訴えるために、まず神自身がそれをいかに証明しているか論じ、その後人間がいかに知の尊さを証明しているか論じる。神による知の尊さの証明は、それがどのように聖書に示されているかという筋書きから成り、人間による証明としては、ハドリアヌス帝やアレクサンドロス大王、カエサル等の古代ローマの人物の中でも学があった人々による偉業の数々が提示される。ここで注目しておかねばならないのは、バイコンにとって知が本源的には神に由来するものとして想定され、単に人間の生活向上のための道具として捉えられていないという点だ。

最初に、知の尊さ (*dignitie of knowledge*) を、原型 (*the Arch-tipe*) または当初の基盤のなかに、すなわち、神の性質とみわざのなかに、それらが人間に啓示されていて、観察しても不穏当でないかぎり、探し求めることにしよう。この場合、われわれはこの原型を学問 (*learning*) の名のもとで探し求めてはならないだろう。というのは、すべての学問は習得した知識であるのに、神の知識はみな本源的 (*original*) なものであるからである。それゆえ、われわれは、これを別の名、聖書が呼ぶところの知恵 (*wisdom*) または英知 (*sapience*) の名のもとで、探し求めなければならない。⁽²¹⁾

神を求めるという行為には信仰という学問以外の道筋もあることを認めた上で、ペイコンは神の英知の中に、人間の学的営為の対象となる自然の知が含まれているということを開示してゆく。まず知の尊さの神による証明として、知が神によって発せられ、天使の階級と旧約と新約聖書および十六世紀に到るまでの歴史を通してどのような形で顕現しているか綴っている。ペイコンによれば、神からはじまり流出する英知は、人間に啓示として示されており、それは観察できる範囲のものであるため、歴史を展望してみればそのあらわれを看取することができる。その考えにもとづいて、彼は神の英知の歴史を、十六世紀に至るまで展開させていく。まず神の仕事にみとれる力と英知という二重の流出にはじまり、天使の階級にみられる知天使（ケルビム）の支配的な地位、そして天地創造と人間に与えられた被造物を名付けるといった知的な仕事、アベルとカインの仕事、モーセの律法、ヨブ記にみられる自然哲学、ソロモン王の英知、キリストに至るまで、聖書に記された神の英知のあり方が記述される。それに続いて教父の時代、そして人文主義運動やイエズス会の知的活動が引き合いに出される⁽²²⁾。

注目すべきは、神を由来とする「知恵または英知」の系譜の中に、「自然」に関する知が歴然として含まれているという彼の主張である。ペイコンは次第に神の知恵と人間による学門を関連づけ、自然に関する知を、神に由来する知の系譜にあるだけでなく、人間の学的な営みにより深められねばならないものとして、更には、啓示を理解するためにも有効なものとして提示する。例えば、ソロモン王について記述の中では彼が他の何よりも知恵を求めたことが神に祝福されたことについて言及し、そのソロモン王が自然哲学的な書物を書いていたことを根拠に、自然に関わる知を、神と人間との間で相互的にやり取りされる遊びの材料であるかのように描く。

彼（ソロモン）ははっきりと、「事を隠すのは神の誉れであるが、それを見つけるのは王の誉れである」と言っている。まるで、子供の無邪気な遊びのように、神（Majesty）は、見つけさせるために、みわざをお隠しになって楽しんでいるかのようで、また王（King）はまるで、その遊びで神の遊びづれになるよりも大きな名誉はないかのようである——能力や手段の素晴らしき統率を考慮すれば、王達から何も隠される必要はないのであるから。⁽²³⁾

そこに表現されているのは、自然の秘密を隠すことに喜びを覚える神と、それを見出すことに喜びと誉れを見出す人間の親密で且つ遊戯的な関係である。この神と人間の相互的な交流の中におかれるのが、自然の知である。

ソロモン王の話に続いて、神の英知がいか人間による学に顕現しているかが語られる。例えば、聖パウロの「学」、教会が保存した異教徒の「学」、そして十六世紀におきた宗教改革は、神の英知のあらわれとして解釈される。宗教改革に至っては、それは人間によって為された歴史的出来事というよりも、神によって予定されていた出来事として語られる——「あらゆる知識の革新と再生が行なわれねばならぬように、神の摂理によって定められていた」として⁽²⁴⁾。

このような神の摂理のあらわれの続きとして、聖書と並んで神によって書かれたもう一冊の本である「自然」が、新たな学びの対象として注目される。「あなたがたは、聖書も神の力も知らないから思いちがいをしている」といった神が、「あやまちをおかしたくなければ読みなさい」と人間に与えたものとは、

まず、神の意思をあきらかにしている聖書であり、ついで、神の力をあらかず被造物であるが、後者は前者に対するかぎである。そして救主は、理性の一般的な考えと言語の規則とによって、聖書の真の意味を理解することができるように、われわれの理解力を開くだけでなく、とりわけ、われわれの信仰の目を開いて、神のみわざにとくにはっきりしるされ刻まれている神の全能を十分に省察することにわれわれをさそいこんでくださるのである。(25)

このように自然に関する知的探求は、神によって奨励された事柄として理解される。この知的探求は、人間の生活の利便性を向上させるといった功利主義的な目的に従うのではなく、神による啓示の理解を補佐するという宗教的な役割を担わされているのだ。

3-2 知による傲慢と知の増大——ふくれ上がり問題——

ベイコンが自然に関する知的探求に見出していた宗教的な役割については、彼の死後に出版された『ニュー・アトランティス New Atlantis』（1626）の中でも寓意的に示される。ベンサレムという理想郷では、「サロモンの家」あるいは「六日創造学院」という自然研究機関が国の中枢を担い機能している。その研究機関では、あらゆる自然についての研究が行われ、自然が崇拝されている。ベイコンが描くユートピアの中で注目に値するのは、この自然についての知識を豊富にもった「サロモンの家」の賢者が、理想郷におけるキリスト教伝来と深く関わりをもつという点だ。つまり、このストーリーの中で自然の知は、キリスト教の十全な受容に必要なものとして捉えられているのだ。

ベンサレムにおけるキリスト教伝来の物語は以下のように展開される。ある日ベンサレムの沖合に天辺に十字架のついた光の柱が現れる。それに近寄ろうとすると誰しもが金縛りにあってしまうが、サロモンの家の賢者だけはそれに近づくことができる。賢者がある祈りを捧げるとたちまち光の柱は消え、代わりに木箱が現れる。その木箱の中には旧約と新約聖書、および聖バルトロマイの手紙が入っており、誰もがそれらを読むことができるという奇跡がはたらいていた。これが幸いして、ベンサレムにはキリスト教が広まったという。賢者による祈りには重要な知恵が含まれており、それが神に認められたからこそ、啓示が人々にもたらされたのだ。この賢者の祈りには、ベイコンによる神学と哲学、あるいは啓示と自然の関係についての考えが反映されている。

天地の主なる神よ、あなたはみ恵みにより、われら（サロモンの）家の者に、あなたの創造のみわざと、その秘密を知らしめ、聖なる奇跡と、自然の働きと、人工の業と、あらゆる

る種類の詭計と幻想とを識別する力を（人間相応の程度に）授けられました。私はここにみなの前で証します。私どもがいま目の前にしているものはあなたの指（のわざ）であり、まことの奇跡であることを。そして書物で学ぶところに依れば、あなたが奇跡を行い給うのは聖なる特別の御旨のためでありますから、（なぜなら自然の法則はあなたご自身の律法に他ならず、それを超えるのは大いなる理由があつてのことです）どうかこの徴を輝かせ、すでに私どもに徴をお送りくださったことで一部を約束して下さっておられる、その意味と用途を、御恵みのうちに示して下さることを謹んでお願い申し上げます。⁽²⁶⁾

サロモンの家の賢者は、天地創造に関わる秘密、被造物の成り立ちを理解する能力を授かっている。彼らは何が「自然」であり、またそうではないのかを識別することができ、同時に自然を超える超自然的なものについても、それが神の御業である「奇跡」なのか、もしくは詭計や幻想であるのかを識別することができる。だからこそ賢者は光の柱が「自然」現象や自然の驚異として間違えられるようなものではなく、超自然的な現象であること——「神」によってもたらされた「奇跡」であるということ——を理解している。賢者のそのような理解が神に示されると、光の柱は消えそこに聖書が与えられる。この筋書きの中には、伝統的にキリスト教において認められてきた自然神学と啓示神学の関係が反映されている。前者は後者を補佐するものとして考えられ、ベイコンもその考えに則り、「自然の書物」の解説が聖書を理解するための「鍵」になるのだと主張していたのだ。

そのため、ベイコンにとって自然の知とは、ただ森羅万象の自然に関する知識である以上に、キリスト教の神学的枠組みの中で基礎として位置づけられるものであった。キリスト教においては信仰に勝るものはないが、自然を通じた哲学的なアプローチも、信仰の道よりは困難であるにもかかわらず、神へと至るまっとうな道として認められてきた。そのため、ベイコンの描く理想郷においても、自然の知は、キリスト教の啓示を理解するための土台のような役割を担わされているのだ。

4. 同時代人との対比

4-1 自然を置き去りにした歴史の過ち

ここまで、ベイコンの思想において、自然の知が人間にとって本源的に神に与えられたものであり、キリスト教信仰においても基盤的な役割を担うということを確認してきた。彼の描いた理想郷では自然の知がしっかりと中心に据えられていたが、実際の世界においては、それが蔑まれた状態にあるとベイコンは考えていた。ベイコンは当時の学問状況を批判的に捉え、自然に関する学問的な研究の乏しさを時代の問題としてあぶり出す。彼は、宗教改革を神によって予定された知を刷新するための機会と捉えたにもかかわらず、当時の知的環境を最も特徴づける人文主義運動に対しては、冷ややかな目を向ける。その理由は主に、人文主義においては言葉の探求に重点が置かれすぎたがために、自然が探求の対象として置き去りにされたことに尽

きる。

彼の歴史理解によれば、ルターによる宗教改革以来、学問は弁論術など主に「ことば」の問題に傾倒しており、「ことがら」の研究を放置してきてしまっている。ルターによるローマ教会の批判は、世論の支持を得ることができず孤立していたため、「古代の全ての作家を援用し、昔の時代に援軍を求めなければならなかった。」⁽²⁷⁾これが、古典の言語を念入りに研究する必要をよび、同時にスコラ学者への敵対を助長することになった。また同時に「一般大衆の能力にあう接近の手段として雄弁と弁論が尊重され要求される」ようになり、これが極端にまで研究されることになる。こうして、「人びとはことがらよりもことばを追いまわしはじめ、字句の適切、文の申し分なく洗練された構成、文節の心地よいリズム、ことばのあやと比喻で作品に変化と輝きを与えることなどを求めて、ことがらの重要さ、主題の価値、論証の堅実さ、創意のはつらつさ、判断の深さなどを求めなくなった。」⁽²⁸⁾ベイコンによれば、人びとがことばを研究してことがらを研究しない場合、学問への信用の低下という「第一の学問の病気」が生じる。なぜなら人びとは、学者たちの言葉が「絵本の頭文字のようなもので、多いに飾りたてられているけれども、ただの文字にすぎないことを知る」からだという。こうした状況を彼は「ピグマリオンへのぼせ上がり」と揶揄する——「ことばはことがらの象徴にすぎない」のであって、「言葉と恋におちることは、絵と恋におちるのとまったく同一」であり、ことばの探求は、ベイコンによれば真実の探求にふさわしくない⁽²⁹⁾。

ベイコンは当時の学問を悲観的にとらえていたが、とりわけ自然に関する知的探求が為されていないことを問題視し、次々と問題点を列挙して行く。アリストテレスをはじめとする少数の著作のみを知識の源泉とするスコラ学者たちは、神学において聖書をおきざりにしたのと同じように、自然の探求において「神のみわざのお告げ」をおきざりにし、アリストテレスなどの作家が示すまやかしの歪んだ像を拝んだ⁽³⁰⁾。またその後の人文主義者らは、「自然の考察と経験的な観察をすっかりやめて、神のみわざを記した書物を判じることを蔑み」人間の霊や精神に予言をさせた⁽³¹⁾。

最終的に「他の何よりも大きな誤り」としてあげられるのは、「知識の最終的な目的を見誤りはき違えること」であるという。ベイコンは、神から与えられた自然理性を正しく使うことと、知識を得るという目的と関連づけて語る。人間は好奇心を満足させたり心を楽しませるため、あるいは名声のためや、金儲けのために知識を求めるべきではなく、神から授かった理性を、人間の利益になり、役に立つよう、誠実にりっぱに使うべきで、それは「創造主を讃美し、人間のみじめさを救うために、豊かな宝庫が求められるよう」でなければならない、として⁽³²⁾。

ベイコンは自然の知がなおざりにされてきたこれまでの歴史を恥じ、それが学問の体系全体の中で支配的な地位に昇格されることを望んだ。自然哲学は中世の大学において自由学芸科目の一つとして存在していたが、主に教えられたのはアリストテレスのテキストにもとづく議論であり、神学に従属した学問として位置づけられていた。そのため、言い換えれば、自然哲学は学問的に補佐的な役割を果たす「侍女」と形容されてきた。彼によれば、自然哲学が「侍女」として補佐役に回されてきたのは、キリスト教が受け入れられ広まってから多くの優秀な知能がより生活の糧が得やすい神学へと流れてしまったからである⁽³³⁾。更に文芸復興があり、

宗教改革も経たため、西欧人の間では神学の学習が支配的になってしまったとベイコンは認識している。遡れば、ローマ帝国の時代には道徳哲学が最も重視されたし、自然哲学が最も栄えたとされるギリシャも長続きしなかったし、道徳哲学への関心の方が高かった。そのような歴史に支えられて、ベイコンも哲学は神学につかえる「侍女」であり、信仰をひらくための補佐的な役割を果たすという伝統的な認識を引き継いでいた一方で、そのような一般的な理解に対して、哲学に新たな役割を与えようとする。彼は「自然哲学は「母」として位置づけられるべき」なのに「思いがけない侮辱を受けて侍女の職に引き落とされた」のだと述べ、「哲学」は「母」のような位置づけに格上げされねばならないと主張する⁽³⁴⁾。哲学は、神学を補佐するのではなく、独立して諸学をまとめるような学として生まれ変わらねばならない、とベイコンは考えたのだ。

以上のように、ベイコンは自然の知に関する哲学的探求が学問全体の中でも、より支配的な地位に昇格して行くことを望んだ。そのためには、より広く自然誌が蒐集され、自然哲学の探求につき込まれねばならないと考えた。しかし、自然の知のあり方に変化を求めていたベイコンは、未だに自然に関する知を完全に神学や道徳から切り分けたのではない。やはり彼にとって、自然の知はキリスト教の神学的コンテクストの中で語られねばならないものであった。それだけ自然の知は当時、神や神学との関係性の中で考えられるのが一般的であったのだ。

4-2 ベイコンの墮落観の特徴

それでは、先述したベイコンの自然の知と墮落に関する見解——人間に自然本性的に備わっていた自然の知は、墮落によって失われてしまったが、自助努力によって幾分かを取り戻すことができるという考え——は、当時特異なものであったのだろうか。この点については、当時の宗教思想が、宗教改革を経て一様ではなかったというところから分析される。人間に生まれながらに、つまり自然本性的に備わった能力については、カトリックとプロテスタントの間で随分と異なっていた。プロテスタントは墮落の影響を非常に強く捉え、それが身体だけでなく、精神にも及んでいると考えた⁽³⁵⁾。つまり、神によって与えられていた自然本性的な知はすっかり失われているとされた。ベイコンもこうした人間の本来的な知の喪失を想定はしていたものの、彼の場合、それは完全に失われたのではなく、創造時に神によって人間に吹込まれた知の源は墮落の後も残されているのだと考えた⁽³⁶⁾。これに反してカトリックは、教会によって執り行われる秘蹟である洗礼によって、原罪の汚れは取り除かれ、魂の正しさが取り戻されると考え、原罪が人の体や魂に内在する性質だとするプロテスタントの考えに強く反対した。プロテスタントは、墮落は超自然的能力を失わせただけでなく、生来の能力も衰退したのだと主張するが、カトリックはこれに合意せず、知性は原罪の呪いから免れているという見解を保持した。カトリック側のこのような人間性の十全性を担保しようとする姿勢は、トリエント公会議の異端宣言にもあらわれている。そこでは、原罪が洗礼によって許されているにもかかわらず、それが完全に取り除かれていないとか、魂にその根が残っているという主張をする者は異端であると宣言されたのだ⁽³⁷⁾。

このような背景の中で、墮落をめぐる思想の対立を考慮すると、ベイコンの墮落に対する意識は、墮落の影響を永続的なものとして捉えるプロテスタントの土壤で育まれたことが理解さ

れる。ベーコンの母親は、当時のイングランドで後にピューリタンと呼ばれるようになる改革派の出身であった。そのためベーコンも青年期までは、改革派の思想を吸収して育ったが、改革派の先鋭性が当時のイングランド国教会の体制に反対するようになると、政治に関わる身分であることから、改革派の人脈からは故意に離れていった⁽³⁸⁾。墮落の影響をひときわ強調する改革派の思想を振り返ったベーコンは、その信憑性を検討し、更に様々な学的探求のなかで独自の解釈——墮落による自然の知の喪失は学問によって回復されるという——に辿り着いたのだと考えられる。

5. ベーコンの自然探求思想の宗教的性格

5-1 知の獲得における道徳と愛——愛のもとに求められる自然の知——

ベーコンは前述したような独自の原罪理解を背景に、正しく神に認められる知の求め方を提示する。知の量的な増加を求めたからといって、知の獲得に関する道徳的次元が排除されたのではない。知の獲得は、ただ人間のために為されるべきものと想定されるのではなく、やはり神との関係性の中で語られる。ベーコンによれば、更なる知識を求めるにあたって「神の善あるいは愛を真似ようと追求することに、人間も霊も行き過ぎて逸脱するようなことはない」⁽³⁹⁾。ベーコンは愛という理念を掲げ、知の獲得や利用が愛のために為されねばならないと提言し、これにより知の獲得に関する道徳的な要請を満たそうとする。

ベーコンは、自身が提示する新たな哲学によって知の量的な膨張がもたらされることに対しては何の道徳的な問題もないとするが、問題があるとすれば「量」ではなく「質」にあるとし、知の服用において解毒剤となる「愛」が必要なのだと訴える。ベーコンは知の獲得を悪や罪と結びつけることにより制限してきた伝統を継承して、「知識は、その量が大きくあろうと小さくあろうと、それにほんとうにきく解毒剤なしに服用される場合、ある有毒で有害な性質を含んでいて、その毒気のために、風気がたまったりふくれたりすることがおこる」という前提を置き、「愛」という解毒剤が混用されれば知識は最上のものになると提言する⁽⁴⁰⁾。これを立証するためにベーコンは「知識は人を誇らせるが、愛は徳をたてる」⁽⁴¹⁾というパウロの言葉や、「たとえわたしが人びとやみ使いたちのことばを語っても、もし愛がなければ、やかましい鐘と同じである」⁽⁴²⁾という句を引用し、知的探求の目的を愛と結びつけるよう促す。自然についての知は量的に増やされ、愛をもって活用されねばならないものとして位置づけられるのだ。

ただ双方（神学や哲学）を愛（*charitie*）のために用いて高慢（*swelling*）のために用いないように、実用（*use*）にあてて誇示（*ostentation*）にあてないように、なおまたこれらの学問を愚かに混合したり、混同したりしないように気をつけなければならない。⁽⁴³⁾

ここで言われている「愛のため」という目的をベーコンがどのように解釈したのだろうか。彼の愛の理念は、神の愛による魂の救いのような内的な性質のものというよりもむしろ、実世界

における改善として構想された。神学や哲学の知を「愛のため」に用いながら、同時に「実用にあて」られるべきだという言明からも読みとられるように、具体的には、より善い統治がなされることや宗派間の争いがなくなること、人間の寿命が延びること、衛生状態がよくなること、作物がより効率よくできること等が、彼の考えた愛のために用い且つ実用にあてるという理念において想定された事柄であった。

ベイコンが新たに構築した知をめぐる倫理とは、ただ人間のために自然を用いるという単純な図式にあてはまるものではなく、獲得してゆく自然の知を「愛」というキリスト教的理念のもとで用いるという道徳的な軸をもたされていた。ただ、ベイコンが想定していた救済や愛は、人類がよりよく生きるためのユートピア的指針となり、具体的には人類の健康や衛生、食物供給、知の伝達など、物理的な次元に還元されたため、ベイコンの思想は功利主義や人間中心主義といった近代的な理念と結びつけられることが多く、その反面、彼の提言の宗教思想的な側面は忘れられがちである。

ベイコンは知の獲得をタブー視する思想潮流に対しては、それが誤解であると訴え、人間性の可能性に依拠して、自然の知を積極的に増幅しようという倫理を構築した。しかし、それを行う上で、知の獲得に関する道徳的な次元を取り払ったというわけではなかった。新たに「愛」という理念を掲げ、知の獲得や活用において神の善を真似て、愛のもとにおいて知を育むべきだという理想を打ち出したのだ。ベイコンが人間社会の中でユートピアを学問によって志向するという側面は、当時のピューリタニズムの言説に感化されながら、世俗内で愛を実践するという傾向と共鳴する⁽⁴⁴⁾。

先ほど見たように、ベイコンは墮落によって人間の自然本性的能力が著しく低下したとするプロテスタンティズムの考えを完全には受け入れずに、信仰や学問といった現世における人間の営みによって、墮落の影響は改善されるのだという考えを表明していた。ベイコンは、人間性あるいは人間の自然本性の衰えを悲観視するのではなく、本来的に人間は神に自然についての知を授けられていたのであるから、その神的な知の由来に依拠して、知を発展および増幅させることを望んだ。

ベイコンは聖書にもとづいて人間には神から知が授けられていると語り、人間の理性を自然の光と称し、それを人間が創造された時に神から直接的に吹込まれた息吹から生じたものだと語る。

しかし、ベイコンの思想の中で知の神のごとき性格 (**true character of divine presence**) について語られる場面は、聖書に依拠したものだけに限られず、ギリシャ神話の神々の性質も含まれる。ベイコンによれば、ケレス、バックス、メルクリウス、アポロ等の神々が崇められている理由は、彼らが人間の生活に役立つ技術や才能、品を発明したからであった。つまりベイコンはエウヘメロス主義を信奉し、これらの神々はもともと人間であったと考えているのだ。彼らは人類にとって「恒久的で普遍的なもの」を発明し、それによって人類にもたらされたものが「天国の恩恵」のようであったため、神化され神々と共に祀られることになったという⁽⁴⁵⁾。こうして見ると、ベイコンにとって神のごとき性格とは、人類に多大な貢献をもたらしたことによって人間に授けられる称号であったとも理解することができる。ベイコンはこのように人

間の本来の能力を最大限にまで引き延ばし、知を発展させ、増幅させることを望んでいた。言い換えれば、人間は神のごとき性格を帯びようになるほどの知的な偉業を成し遂げることができるという考えが、バイコンの人間性に対する希望であり、期待であったとすることができよう。

5-2 精神の耕作——人間性の完成——

ここで目を向けておきたいのは、自然の知と人間性の関係だ。自然を探求することによって、人は自然についての知を培い、いずれそれが人間の生に役立つようになると、その探求者は人格化される。言わば、自然に関する知的探求は、そのまま人間性（人間の自然）を高めるための行いとして解釈されているのだ。

人間の本来的な能力について希望的な見通しを持っていたバイコンは、人間の自然本性をそのまま放っておくのではなく、積極的にその鍛錬に関与して、精神をよい状態に保ち、徳性を伸ばしてゆくことを勧めた。『随筆集 Essays』の中におさめられた「Nature in Man」という短編において、人間性は難をあえて課すことによって改善されるもの、いわば調教の対象として現れる⁽⁴⁶⁾。『学問の進歩』の終盤において、バイコンはこの人間性の開発というテーマを主題的に扱い、道徳哲学の伝統を継承して「人間の精神の耕作 Georgics of Mind」と呼び、人間の精神を鍛錬するための具体的な方策について語る⁽⁴⁷⁾。その中で目指されるのは、愛というキリスト教の精神のもとで成し遂げられる人間の徳性の完成である。

人間性の完成というテーマは、ストア派の哲学者によって提唱され、ルネサンス期にはユストゥス・リプシウス（1547-1606）等の人文学者によって再び注目を集めることになった。人間の精神の耕作というこの道徳哲学的テーマには、アウグスティヌスをはじめとして伝統的にキリスト教的な解釈が為されており、バイコンはこのキリスト教的道徳哲学を採用する。ケケローは教育されていない人を耕作されていない土地に喩え、哲学を耕作の手段として提示したが、これにアウグスティヌスはキリスト教的な解釈を加え、人間の精神を耕作するのは神であり、神の言葉によって雑草が抜かれ、神の教えによって心が耕され、祈りの種が植えられるとした⁽⁴⁸⁾。バイコンによれば、「ストア哲学者は善の最高段階に関して果てしなく論争を行い、その最高の段階を幸福や至福、最高善など」と呼んだ。いわば道徳哲学は「異教徒の間では神学の代用物」であったが、「キリスト教の信仰によって終止符をうたれている」とバイコンは理解する⁽⁴⁹⁾。しかし、彼はキリスト教の導きを尊重しながらも、同時に道徳哲学の教えからも学ぶことはあるのだと考える。

われわれは皆未熟であることを認め、未来の世界に対する希望に因る幸福を受け入れなければならない。このようにしてわれわれは哲学者の天国の教えから解放され自由になっているのであるから——哲学者たちはこの教えによって人間の本性（Mans Nature）を実際よりも高めることができるかのように装ったが（中略）——それ以外の彼らの苦心の探求と成果をより冷静に且つ誠実に受け入れてもよいのではないだろうか。⁽⁵⁰⁾

十六世紀には、人間性を完成させるための手法として、古典の知識を修得するだけでなく、自然に関する学習も含まれはじめていた。例えばコンラッド・ゲスナー等の自然誌家は、植物の探求を通して自己の精神や感覚を改善する可能性を示したし、ラブレーが描いたガルガンチャは、パンタグリユエルに道徳的になるために自然誌を学ぶことを勧めている⁽⁵¹⁾。

ベイコンもまた先述したように自然誌に携わることを勧めるが、彼の場合、それは個人の完成のためというよりも、「人類のため」という公的な性格を持たされている。つまり、彼が理想とした自然探求は自己の充足を計るための個人的な行いではなく、そこから得られた知を広く活用して、より多くの人の生活に資するものへと昇華させることであった。もともとは個人的レベルにおいて為されると考えられていた人間性の完成というテーマは、どのようにして公的な目的を持たされるのか。これを解明するためには、ベイコンが語る「精神の耕作」のキリスト教的な要素が鍵を握っている。

まずベイコンの提唱した精神の耕作の概要をおさえた上で、そのキリスト教的な特徴に注目しよう。ベイコンによれば、精神の耕作および治療において重要なのは、人々のさまざまな性格や気質を分類して記述することだという。人々の天性や運命は、精神の耕作において意のままになるものではないが、人を理解するためには、その人の性格と気質、そして性別や年齢、地域、健康状態などの自然の刻印、また付帯的な幸不幸、地位、身分、富、繁栄、不遇等についておさえていなければならない。これらのことは、精神の病気や疾患を見定めるための基本的な情報となる。精神の病気は、心の動揺と感情の異常によるもので、本性のままの精神は、感情が風のように騒がせ乱さなければ、本来的には穏やかに落ちついているものなのだ。

では、精神を健康で良好な状態に維持するためには何をすればよいのだろうか。ベイコンは、精神に影響を与えるものとして、習慣、鍛錬、習性、教育、模範、模倣、競争、交流、友人、賞賛、非難、勧告、書物、学問を挙げる。これらは、人間が自由に操ることができ、性格を変えるような力と作用をもつもので、この中から精神を良好に維持するのに役立つ処方が調剤されるのだと言う。身体の鍛錬を規制する教則があるように、精神の鍛錬を規制する教則も沢山あるとして、いくつかの例が挙げられる。例えば、難しすぎる仕事や易しすぎる仕事は引き受けないという教則や、生まれつき傾向をもっているものとは反対の極端に向かうべきだとするもの等があるが、精神を良好な状態に固定させ、大事に育てるには、誓いを立てて、それを遵守するのが最善であるという。

ベイコンは、精神を有徳で立派な状態にするのに最も優れた有効な手段は、到達が可能と考えられる「生活の善良な有徳の目的をひとの目の前に選んで示すこと」であると考えたが⁽⁵²⁾、なぜそれが有効なのだろうか。彼の考えでは、正しく立派な目的を掲げ、それに伴って目的に対して堅い決心を持ち、忠実で誠実であるなら、人は一挙にあらゆる徳の型にはまることになる。このプロセスは自然のはたらきと似ており、自然が花や生物をつくる時、すべての部分の基礎を一挙に形成するのと同じなのだという。立派な目的に専念することが、習性によって徳を身につけようとするよりも有効なのは、その目的を目指すという気構えによって、あらゆる徳が体現されるからだという⁽⁵³⁾。

ベイコンが精神の耕作において最善の方法と考える「目的を掲げる」という手法は、最終的

にはキリスト教的な愛の教理と結びつけられる。ペイコンによれば、目標に向かっている人の心境は、キリスト教およびキリスト教の信仰によって導かれる。キリスト教が人々の魂に愛を植え付け、この愛がすべての徳を包み込み、結び合わせる。愛は、道徳すべての教え以上に、大きな完成へと突然に仕上げてくれるし、愛は精神を奮い起こしもするが、同時に精神を落ちつかせることもする。ペイコンが語るキリスト教的道徳哲学の最終的な目的は、神の愛を真似るようにして人は知識を求め育むべきだという前述の教えに結びつく。

「あなたがたは善悪を知って神のようになるだろう」とあるように、知識において神に似ようとあこがれて、人間は罪を犯し墮落した。しかし神の善や愛を真似ようとして、人も天使も決して罪を犯さないし、犯すべきではない。⁽⁵⁴⁾

その模倣すべき神の愛がどのようなものかと言うと、それは「あなた方の敵を愛し、憎む者に善をほどこし、むごく扱い迫害する者のために祈れ」というマタイ福音書からの一節にあらわされているのだと言う⁽⁵⁵⁾。人が自分にとってどのような人であったとしても、その人を慈しみ、善を為し、その人のために祈るという理念が、精神の耕作と呼ばれる精神修養の中で最も大事な指針として掲げられているのだ。人はこうして愛の理念のもとで、自分よりも他者を重んじ、いたわるよう導かれ、あらゆる徳を体得し、人間性を完成させるよう勧められる。自己の精神修養を導いた道徳哲学の伝統に他者への関わりを必須とする愛の教理を加えることによって、ペイコンは個人のレベルにおいて行われる人間の完成というテーマに、「人類のため」という広く公的な性格を与えた。ペイコン自身も「キリスト教の信仰 (Holy faith) ほどに、社会的な善 (good that is Communicative) をはつきりと高く称揚し、私的で個別的な善を低くみる哲学も宗教もその他の訓練もないと断言してまちがいないだろう」と見立て、その公的な力点を認めている⁽⁵⁶⁾。

これまで確認してきた通り、ペイコンは自然誌の蒐集を人類が世代を越えて協力し合って蓄積すべきものと考えたし、自然探求を個人の楽しみのためだけではなく、人類の生活に資する成果をもたらすものと想定していた。つまり、彼にとって自然の知は個人の領域に限定されるものではなく、より広い人類という集団によって育成され、且つ人類全体に還元されるべきものであった。自然探求によって洗練される自然の知は、個人としての人間性を高めるだけではなく、人類そのもののあり方を向上させるためのものであり、それは人間同士の相互的な関わりを要請するキリスト教の愛 (charity) の精神のもとで培われたものであったと言えるだろう。

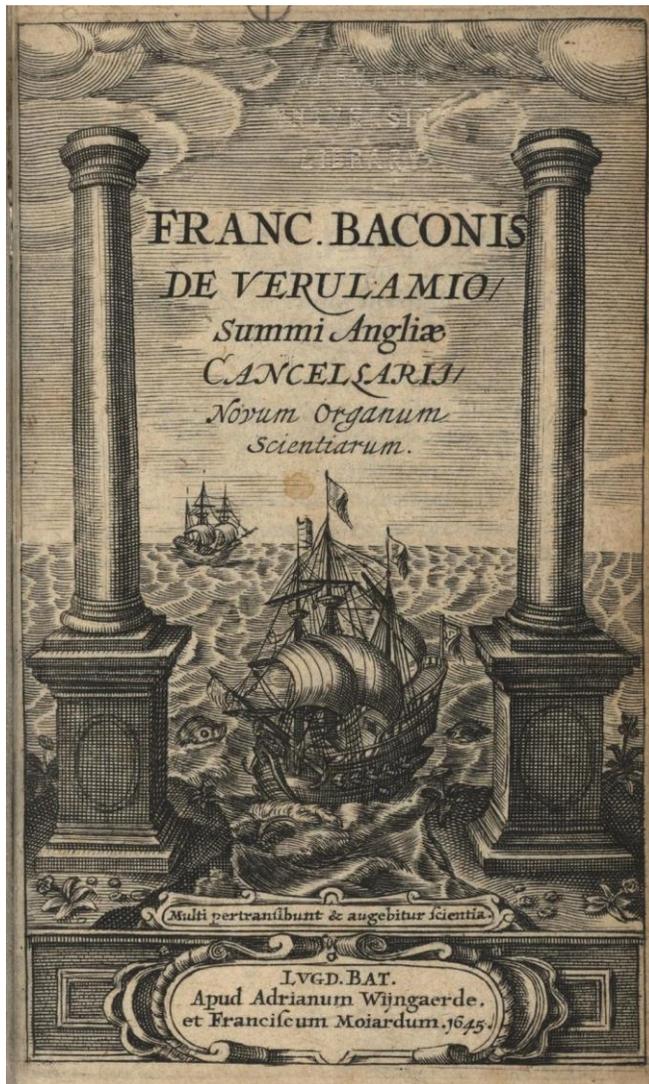
自然の知とキリスト教的な愛の関係は、先述したマタイ福音書からの引用の続きにもあらわされる。そこでは、神に倣うべきとして提示された博愛の精神が自然現象のなかに見出されている——「天の父は、悪い者の上にもよい者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨をふらして下さる」⁽⁵⁷⁾。人の善悪に関わらず人を育む自然の作用は、神の愛のあらわれとして理解されている。ペイコンによれば、神の本性を言い表すために、(道徳哲学の伝統を形成した) 異教徒たち (ギリシャ人) は「最善にして最大なもの」と言うのに対し、聖

書は「神の慈悲は彼の被造物すべてにあまねく及んでいる」と言う⁽⁵⁸⁾。つまり、キリスト教が教えるところの人が模倣すべき神の愛のあり方は、自然のなかに顕現しているというのだ。神が自然を通して広く人間に恩恵を与えるように、人間もまた愛の精神のもと、自然探求という行為の目的として、人類全体に及ぶあまねく恩恵を見据えるべきだという考えがここにある。これが自然科学の公的な性格を予期させるものであることは言うまでもないだろう。

6. 結び

本稿では、バイコンの思想において、人間による知の獲得というテーマがいかにかに構想されていたかを広く検討した。まず、自然の知の獲得をタブー視していた思想潮流がどのようなものであったかを概観し、バイコンがそれに対していかに自然の知の増加を推進したかを確認した。自然の知の増幅は、宗教改革を経て様々な知識の刷新が行われた十六世紀においてこそ起こるべき歴史的宿命だとバイコンは考えた。それを証拠づけるのは、ソロモン等の旧約聖書の賢者たちが自然についての知を保持していたという啓示であり、同時に人間が自然についての知を神から与えられていたという創世記からの啓示である。人間には自然本性的に自然についての知が与えられていたというバイコンの認識は、自然の知を獲得するという行為を、本源的な墮落前の人間への回帰、つまり罪なき状態への遡行へと連結させる。つまり、自然の知は、墮落後の人間が取り戻さねばならないものとなる。かつてより知の獲得をタブー視する潮流が残存していた中で、バイコンは自然の知の獲得は人間の根源的なタブーである原罪とは全く関係がないと主張し、自然の知は本来的に神が人間に与えたものであるため、それを学問や技術によって取り戻すことに何の道徳的な問題もないと考える。しかし、バイコンにとって、自然の知の獲得やその使用に関する道徳的な要請が一切消え失せたかという点、そうではなかった。知は本源的には神に還元されるものであるという意識のもと、バイコンは知的探求や知の活用は、神の愛を真似るようにして為されねばならないと主張する。そのため、バイコンの想定していた自然の知とは、愛という理念のもとで獲得され、生まれ、使用されるものとして、その道徳的性格を保ち続けていたと言える。バイコンが抱いた知の増幅に関する楽観的な展望は、彼が人間性をどのように捉えていたかという視座に支えられている。彼にとって、人間性は、当時カルヴィニズムの中で強調されたように、永遠に貶められた状態のものではなかった。人間性は定常的に変化しないのではなく、バイコンにとって開発や制御の対象であり、彼はそれを道徳哲学の伝統に倣って「人間の精神の耕作」と呼び、人の精神が最善の状態へと至る道筋を示した。この精神の耕作という修練の中でも、キリスト教の愛が理念として浮上し、人間による知的な営みは、神の愛を真似るようにして行われねばならないと主張される。以上のように、知の獲得および人間性の改善というテーマをめぐるバイコンの思想には、絶えず宗教倫理的な文脈が織り交ぜられていた。そのため、自然を人間のために搾取するのを是とする倫理を築いたというバイコンへの批判は、背後にあるはずの宗教的な要素をあえて排除した理解であり、故に表面的な理解でしかないように思われる。

〈図1〉



註

- (1) キャロリン・マーチャント『自然の死』（団まりな、垂水雄二、樋口祐子訳）工作舎、1985年、310頁。
- (2) Brian Vickers, “Francis Bacon, Mirror of Each Age,” *Advancement of Learning: essays in honour of Paolo Rossi*, ed. by John L. Heibron (Firenze: L.S.Olschki, 2007).
- (3) *The Works of Francis Bacon*. eds. by J.Spedding, R.L. Ellis, D.D. Heath (London, vol.III), p.221, 『ワレリウス・テルミヌス、或は自然の解釈（*Valerius Terminus of the Interpretation of Nature*）』（1603）より。同じ内容は『学問の進歩』の中でも繰り返される（p.71）。当時流通していた Geneva Bible（1560）における同箇所の英語表記は“many shall runne to and fro, & knowledge shall be increased”。
- (4) H. ブルーメンベルク『近代の正統性 II 理論的好奇心に対する審判のプロセス』（忽那敬三訳）法政大学出版会、2001年。
- (5) Edward Peters, “Libertas Inquirendi and the Vitium Curiositatis in Medieval Thought”, in *La notion de liberte au Moyen Age Islam, Byzance, Occident*, (Paris: Les Belles Lettres, 1985), pp.89-98.
- (6) Augustine, *De moribus ecclesiae catholicae et de moribus Manichaeorum (The Catholic and Manichaeae Ways of Life)*, translation by Donald and Idella Gallagher (Washington D.C.: Catholic University of America Press, 1966), pp.32-33. 以下拙訳。
- (7) アウグスティヌス『告白』（山田晶訳）中央公論社、2014年、210頁。
- (8) C. ギンズブルグ『神話・寓意・徴候』（高山博英訳）せりか書房、1988年、120-124頁。
- (9) *Works*, III, p.219.
- (10) Francis Bacon, *Oxford Francis Bacon IV. The advancement of learning*, (以下 *AL* と略称) ed. Michael Kiernan. (Oxford: Clarendon Press, 2000), pp.5-6.
- (11) *AL*, p.6.
- (12) *AL*, p.34; 「額に汗する」は創世記 2:19 から。
- (13) *NO*, p.447.
- (14) Peter Harrison, *The Fall of Man and the Foundations of Science*, (Cambridge University Press, 1994), p.158.
- (15) *Works*, III, p.217.
- (16) *AL*, p.6; “neither is it any quantitie of knowledge how great soeuer that can make the minde of man to swell,”
- (17) *AL*, p.6.
- (18) *AL*, p.7; “it is manifest, that there is no daunger at all in the proportion or quantitie of knowledge howe large soeuer; least it should make it swell or outcompasse it selfe;”
- (19) Francis Bacon, *Oxford Francis Bacon VI. Philosophical studies c.1611-c.1619*, ed. Graham Rees, (Oxford: Clarendon Press, 1996), pp.105-106.
- (20) Francis Bacon, *Oxford Francis Bacon XI. The Instauration magna Part II: Novum organum and Associated Texts*. (以下 *NO* と略称) ed. Graham Rees with Maria Wakely (Oxford: Clarendon Press, 1996) p.450.
- (21) *AL*, p.33.
- (22) *AL*, pp.33-38
- (23) *AL*, p.36.
- (24) *AL*, p.37.
- (25) *AL*, pp.37-38, 川西進訳『ニューアトランティス』岩波文庫、2003年、21-22頁。
- (26) *Works*, vol.III. pp.137-138.
- (27) *AL*, p.21.
- (28) *AL*, p.22.
- (29) *AL*, p.23.
- (30) *AL*, p.25.

- (31) *AL*, p.30.
- (32) *AL*, p.32.
- (33) *NO*, p.125.
- (34) *NO*, p.126.
- (35) Peter Harrison, *The Fall of Man and the Foundations of Science*, (Cambridge University Press, 1994) pp.54-66; Thomas Woolford, *Natural theology and natural philosophy in the late Renaissance*, Ph.D. diss., University of Cambridge, 2011, p.27, p.115.
- (36) ベイコンによる自然理性についての考え方については、下野葉月「フランシス・ベイコンにおける神学と哲学」『科学史研究』第50巻(2011年)、11-16頁を参照。
- (37) *Catechism of the Council of Trent for Parish Priests*, translated by J.A. McHugh and C.J. Callan, (New York: Joseph F. Wagner, Inc., 1934) p.183; Woolford, p.31.
- (38) ベイコンの宗教観については、下野葉月「フランシス・ベイコンの自然探求という宗教」『東京大学宗教学年報 XXIX』(2011年)、69-85頁を参照。
- (39) *Works*, III, p.217.
- (40) *AL*, p.7.
- (41) コリント人への手紙 8:1
- (42) コリント人への手紙 13:1
- (43) *AL*, p.9.
- (44) 樂園を追放された後の世俗内の愛の実践については、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳)岩波文庫、1989年、130-131頁を参照。
- (45) *AL*, p.38.
- (46) Francis Bacon, *Oxford Francis Bacon XV. The Essayes or Counsels, Civill and Morall* ed. Michael Kiernan. (Oxford: Clarendon Press, 2000) pp.118-120; ベイコンが考えた人間性の開拓の手法については、稿を改めたい。
- (47) 精神の陶冶を「精神の耕作」と表現するのは、ウエルギリウス『農耕詩』にもとづいている。
- (48) 道徳哲学の通史的理解及び精神の耕作というテーマにおけるベイコンの特徴については、Peter Harrison, “Francis Bacon, natural philosophy, and the cultivation of the mind”, *Perspectives on Science*, vol.20, (2012); pp.139-158 を参照。
- (49) *AL*, p.135.
- (50) *AL*, p.135.
- (51) James A. T. Lancaster, “Natural Knowledge as a Propaedeutic to Self-Betterment: Francis Bacon and the Transformation of Natural History” *Early Science and Medicine* 17 (2012), pp.181-196.
- (52) *AL*, pp.153-154.
- (53) *AL*, p.154.
- (54) *AL*, p.155.
- (55) *AL*, p.155.
- (56) *AL*, p.136.
- (57) *AL*, p.155, マタイによる福音書 5:45
- (58) *AL*, p.155.